

表情がコミュニケーションの感情伝達に及ぼす影響

0432124 比嘉 大喜

指導教員： 柴橋 祐子 准教授 山崎 治 助教

1. はじめに

近年、文字情報とともに表情の画像を提示することで微妙なニュアンスや感情を伝えやすくしようとするメディアが増えてきている^[1]。画像は多くの情報を持つが、情報量が多ければ感情伝達が高まるといえるのであろうか。本研究では「キャラクタ」として絵文字、アバタ、実画像の3つを使用し、いくつかの表情提示を行い、感情の伝達の程度を調べる実験を行った。

2. 仮説 (キャラクタの利用方法と伝わり方)

本研究では、キャラクタがどのように利用されているのか、キャラクタによって伝わり方に変化が見られるかを以下の仮説を基に検討することとした。

仮説1 伝えたい感情の種類によってキャラクタの使われやすさが変わる。明るい感情の場合は、よりリアルなキャラクタに、暗い感情の場合は、より抽象的なキャラクタが使われやすい。

仮説2 伝えたい感情の強さによってキャラクタの使われやすさが変わる。強い感情の場合は、よりリアルなキャラクタに、弱い感情の場合は、より抽象的なキャラクタが使われやすい。

3. 調査

3.1 方法

(1) 調査対象

本学デザイン科学科 130 名

(2) 材料

キャラクタを図1に示す。3種類の画像それぞれに「嬉しい/怒り/悲しい/驚き」の表情をつけたものとした。また、携帯電話での知人とのやりとりを想定して、上記4種類の感情に強弱をつけた短いメッセージ計8種類を作成した。



図1 利用したキャラクタの画像

(3) 手続き

1つのメッセージに対し、同じ感情を表現するキャラクタ3種類を提示した。被験者は、感情を込めて知人に送信したい場合、どのキャラクタ画像を文末に添付するかを選択した。

3.2 結果

感情の種類：全体として、実画像は使われにくい。また、嬉しい感情を伝達する場合には、絵文字よりアバタが使われやすい。(p=.00)

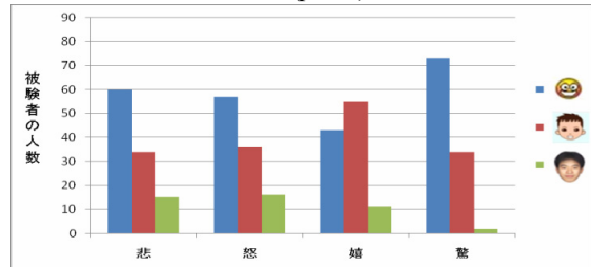


図2 感情の種類

感情の強さ：「嬉しい」「驚き」の各感情において、強弱により使用されるキャラクタ画像が異なった。強く嬉しさを伝達する場合には絵文字が使われやすい(p=.00)。また弱い嬉しさ(p=.00)および弱い驚き(p=.00)を伝達する場合にはアバタが使われやすい。

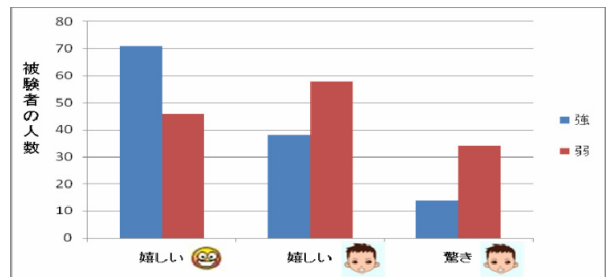


図3 感情の強弱

4. 考察

図2より、嬉しい場面など明るい感情を伝える時には、絵文字よりもアバタが使われやすいことがわかった。アバタは送信側の表情を絵文字よりも連想させ、感情を伝えやすくするのではないかと考えられる。

実画像は使用頻度が低く、その原因として、ネットワークを介した実画像を使ったコミュニケーションが普及していないことが考えられる。

また図3より、絵文字は感情を強く伝えたい場合に使用頻度が高く、アバタは感情を弱く伝えたいときに使用頻度が高くなる。絵文字はインパクトのある表情を表わすことができるために、感情を強く伝えたい場合に使われやすくなるのではないかと考えられる。

参考文献

[1]清水 隼,「ジェスチャと音声のコミュニケーションにおける影響に関する研究」,平成15年度千葉工業大学卒業論文。